令和５年度　幼児教育研修（年齢別担任研修５歳児・第３回）
「子どもの発達と保育者の関わりについて」
日時：令和５年１０月１３日（金）１５：００～１７：００
会場：足立区生涯学習センター
講師：和泉短期大学　　教授　松山　洋平　氏

ドキュメンテーション作成のポイント

ドキュメンテーションは
「私」の視点で記録する

一般化した事実の記録「〇〇をしました」は
「へぇ～」で終わってしまい対話が起こらない

自分が「他の人にも見て欲しい！」と思う子どもの表情や様子を写真に収める＝**「心が動かされたこと」**

選んだ写真自体が保育を語る
＝**「わたしが伝えたいこと」**

写真の撮り方・選び方

★　本当に伝えたい言葉を厳選し、ポイントをしぼる　★

① タイトルと写真の補足説明
② **この場面に至るまでの経緯と保育者の工夫や環境構成**
③ **心が揺さぶられたこと、自分の感じたこと**（保育者の視点）
④ **この場面で子どもが感じていること**（子どもの思い・心の声）
⑥ **今後の展開への期待や心づもり**

エピソード記録では考察にあたる

「私」に見えたもの＝子ども理解

吹き出しで入れる

「私」が読み取った子ども理解・「私」の思いを記録する

同じ場面を見ても、人により**見方（子ども理解）が違う**　➡　それが**「多角的」に見る**ということ

明日の保育がもっと楽しくなる視点

～保育者も一緒にわくわくする保育～

子どものつぶやきを
HDN　ほんとうは　どう　なんだろう
HDS　ほんとうは　どう　したいんだろう
という思いで読み取る

保育者にも　**“もっとこうしたい”**　が生まれる

そうだ!!　　わくわく♪

環境の再構成

前日までの子どもの姿（子ども理解）から構成した環境を、実際の保育場面での子どもの遊び方や遊びの展開の仕方を見ながら、よりよい環境へと柔軟に変えていく

子どもの姿がより深く見えてくるために大切にしたいこと

子どもの内面に目を向けて、今「ある」ことから横並びのまなざしで子どもをみる

- 「ない」「べき」から出発しない
- 子どもの思いや行為の**「意味」**に目を向ける

大人の姿勢や価値観を問い直す

- ◆「教える」のではなく、提案する前に共感し**「聞き上手」**になる『〇〇なんだぁ』
- ◆「私」の**心に響いてきたこと**を言葉で伝える『〇〇なんだね』
- ◆尊厳あるひとりの人間としての敬意をもつ
- ◆自ら学ぼうとしている主体者としての信頼を寄せる

子ども主体の協同的な学び

誰かの「発見」や「問い」に引き寄せられて協同性が広がる

誰かの「ウォ～!!」に反応してみんなが集まる
誰かの「ウォ～!!」がまわりを引き寄せる

誰かと一緒にする方が楽しい
思わず一緒にしたくなる

「よさ」が広がり新たな関係が生まれる

その人は自分とは違うけれどおもしろい!! 自分とは違う姿を「よさ」として認めていく

協同性が起こるためには…

子ども一人一人が自分の興味関心をもとにして、遊びに没頭・試行錯誤し、考えたり発見したりすることに出会える環境構成が必要 ➡「遊び込む」が生まれる環境づくり

個別の「問い」がつながり、他児と「響き合う」ことで遊びが展開する

一人一人の個性が大事にされると同時に、集団も大事にされることで相乗効果が生まれ、豊かな経験を作り出していくところに、保育者の関わりの重要な側面がある

一人一人が大事にされるから集団が光る

“モノ”の側から保育を見る視点

≪ アフォーダンスとは ≫
◆環境が動物（人）に与える「意味」
◆モノがもつ性質が行動のヒントを与える
（例）ボタン→「押す」,ドアノブ→「回す」

アフォーダンス理論から見ると…
子どもは、環境に埋め込まれた豊かな「意味」を見出しながら、周囲の環境と相互的にかかわる

高い所があれば登ってみたくなる、広い空間があれば走り回りたくなる
モノや場などが子どもに与える「意味」に対しての自然な行動である

だからこそ

保育者は、子ども側からの視点を大切にし、子どもと「対話」しながら計画的に環境を構成し、工夫して保育を楽しもう!!

よい環境からは“モノ”の声が聞こえてくる

モノは自然物も人工物も多様な種類があり、豊かで「**多様な意味**」を提供する

➡ **子どもに「多様な経験」をもたらす**

“モノ”の声が多様に聞こえる環境構成を!!

小さい頃からどのような素材・教材に触れてきたのか、協同性を広げる時に活かされる

研修生の報告書より

「ドキュメンテーションの作成のポイント」を具体的に学べた。個々のセンスで作成しているようなところがあったが、ポイントが明確化され、それらを意識することで、より語り合いや保育内容が見えるドキュメンテーションが作成できると感じた。

提案の前に共感する姿勢をとっていくと、子ども自身でどうしたらよいか考えたり、友達同士で提案し合ったりする場面が見られた。自ら学ぼうとしている主体者であることを意識し、聞き上手を目指していく。